

ホール能を観ての余滴

鍵岡正謹

岡山県立美術館には立派なホールがある。年経て優れた建築に与えられる、日本建築家協会25年賞を受賞したばかりの岡田新一設計の美術館ホールはやや細長くなだらかな階段上に200余席あり、なにより高い天井空間と周囲の絨をイメージした淡い彩色タイル(先号の美術館ニュース表紙)の内壁が、独特で高質なイベントホールとなっている。音響がよく音楽ホールでは定評があるが、能楽にも対応できるとかねて聞いていた。▼先の8月、初めてホール能を観た。京観世流・林喜右衛門の「羽衣」は、舞台袖に見たてられた橋がかりと老松の鏡板にアト座や四柱のない舞台であるが、絨模様のタイル鏡板が能衣装に映え、羽衣をまとい舞う舞台を堪能した。▼能は小さい頃に習わされ板間に正座させられる苦行に逃げ出したのに、大学生時代に俳優座で山崎正和戯曲・千田是也演出と主演の『世阿弥』に嵌まり「風姿花伝」や謡曲を読み、観能が習いとなった。古式を残した舞台や薪能での公演もよいが、国立能楽堂が一番の贅沢と思っていたが、わが美術館ホール能も実に素晴らしかった。▼観能のあと、美術館で開催中の川端康成と東山魁夷展を改めてみて、国宝になる玉堂《凍雲節雪図》と大雅《十便図》蕪村《十宜図》と揃ぶ名品に魅入っていた。ふっと、彼ら江戸の文人画家はお能を観ていただろうかと思いがよぎった。7月に関西大学博物館で「角倉素庵と俵屋宗達」展があり、謡曲本表紙題簽に宗達下絵・素庵書を見た。光悦や宗達に光琳は、お能に親しんでいた。▼我らの雪舟は、足利時代に大成した能を観ていたかと想いはめぐる。世阿弥能と雪舟水墨画、ともに心地よい緊張感を強いる二人の芸術であるが。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース106号をお届けします。10月から12月にかけては今号でご紹介している「中村芳中展」「第4回I氏賞受賞作家展」「もっと伝統工芸 備中漆」のほか、「小野絵麻・二三展」「第61回日本伝統工芸展岡山展」と展覧会が目白押しです。また、「日本伝統工芸展」の関連イベントでは毎年恒例の、岡山県立大学テキスタイルデザインコースの学生と共同で企画する自由参加型のワークショップや作家による列品解説を開催します。美術館で本物の作品に触れるだけでなく、実際に体験することで新たな視点が生まれるかもしれません。次第に深まる芸術の秋、存分にお楽しみください。



「美術館の紹介」vol.6

当館中庭に生えている竹の根元に備前焼の大甕が2つ置かれている。これは旧所蔵者宅の裏庭にあった室町時代の古備前である。岡山の昔ながらの民家では、備前焼の甕を庭や玄関に置いている光景をよく目にする。

芳中と交流した備讃ゆかりの大坂画人

中村 麻里子(主任学芸員)



中村芳中《白梅小禽図屏風》江戸時代中期-後期(18-19世紀)

岡山県立美術館では、9月26日より特別展「光琳を慕う 中村芳中」を開催する。千葉市美術館、細見美術館巡回後、3会場目であり最終会場となる。

中村芳中(?-1819)は江戸時代後期に大坂を中心に活動した。最初は文人画風の山水や指頭画を描くが、尾形光琳の画に傾倒、たらし込みを駆使した作品を描くようになる。江戸へ下った芳中は享和2(1802)年『光琳画譜』を出版。その後は大坂へ戻り、ほぼえましい画風の作品を多く残した。今回の展覧会には未公開作品も多数出品されている。

また芳中はたびたび木村兼葎堂の『兼葎堂日記』に登場する。岡山ゆかりの画人宮本君山(?-1827)・淵上旭江(1753-1816)らの名も、『兼葎堂日記』の芳中滞在と同時期に記され、また君山主宰の書画会に芳中は参加している。大原東野(1771-1840)は、備前に滞在中のときに備前出身の詩人・書家である武元登々庵(1767-1818)らと交流した。当館では岡山ゆかりの文人達の大坂画壇での足跡や作品も合わせて展示し、地下展示室「岡山の美術」に特設コーナーも設け、大坂画壇の多様でユニークなネット

ワークを紹介する。

大原東野は文政7(1824)年刊『名数画譜』の編者として知られている。同書は一から千までの数にちなんだ画題を画文で紹介するもので、芳中は「飲中八仙図」を担当している。汝陽や張旭、李太白ら8人の酒にちなんだエピソードを描いている。編者東野は「三生花図」「五客図」など画も多く担当。宮本君山は「九子図」、淵上旭江は「三星図」等、その他京阪神で活動していた多数の絵師が参加している。讃岐の柴野栗山、長町竹石、後藤漆谷、梶原藍渠らの名も見え、備前の武元登々庵の書も載っている。東野の幅広いネットワークが見てとれる。

大原東野は『名数画譜』の中で、自身について「大原民聲 字子楽号東野 南都人住浪花」と記している。晩年を過ごした高松市内における調査では、「晩年に苗田村(琴平町)に移り、琴平街道の傍らに画室を構え、昆虫を蒐集し、門人とともに庭内に藤を植え常に之を愛した。*1」とされている。また最近、大原東野が金比羅道修復に関わったことがわかる新資料等も紹介されている。



上下:中村芳中『光琳画譜』享和2(1802)年刊 千葉市美術館 ラヴィッツ・コレクション



中村芳中『名数画譜』大原東野編文化7(1810)年刊 千葉市美術館 ラヴィッツ・コレクション

さらに備前地方における様々な活動も明らかになってきた。東野は武元登々庵の紹介で、和気町尺所村(現岡山県和気町)の富豪大森家(明治初期より大国家と改めた)の仕事をしている^{※2}。大森家は酒造業などで財をなした家で、初代の満體、その長男茂朝、次男勝衛、勝衛の子満直と続き、地域の文化や教育に尽力した。大国家に伝わる東野の作品は、満體らの肖像画をはじめ、『筑波山真景図』(1802)他数点がある。また東野は閑谷学校創設の由来や諸施設の概要を記した『閑谷学図』の作者と伝えられている(原本については所在不明)^{※3}。高松市歴史民俗資料館には、東野晩年の代表作《玉蘭精舍祝宴図屏風》(六曲一隻 1832)が所蔵されている。近年の岡山香川での調査が進み、これまでほとんど知られなかった東野の活動の一端を紹介することができる。

淵上旭江は当館「岡山の美術展」において、『五畿七道図』(岡山県立美術館蔵)と『山水奇観』の作者としてしばしば紹介してきたが、今回の中村芳中展出品作品の他にも、岡山県立博物館や野崎家塩業歴史館など県内に優れた作品が所蔵されており、それらも特設コーナーで展示する。また著書『漢画獨稽古』で知られる宮本君山の肉筆画は少ないが、中村芳中展では貴重な4点の肉筆画が出品されている。ぜひご注目いただきたい。

最後に、大坂画人とは言えないが、芳中とほぼ同時代を生きた岡山ゆかりの文人画家に浦上玉堂(1745-1820)がいる。玉堂も脱藩後、寛政8年頃を中心にしてしばしば木村兼葎堂宅を訪れている。これまで登場してきた人物たちとも以下のような接点がある。

- ①庭瀬(岡山市)の松林寺において備中庭瀬藩家老・森岡松蔭が催した雅宴の席で、淵上旭江と銅雲泉(1759-1811)と長町竹石(1757-1808)との合作《山館読書図》(1791賛)に、讃岐の梶原藍渠、後藤漆谷、そして浦上玉堂が着賛している。
- ②寛政5(1793)年、玉堂は淵上旭江とともに讃岐の青山雲隣主催の古書画展「暢春楼書画展観」に訪れている。
- ③《岡熊嶽・岡琴嶽・大原東野・浦上玉堂合作山水図》(早稲田大学蔵)において、大原東野とともに玉堂は寄合描に参加している。

また、岡山の豪商河本家は、諸国の文人墨客が訪れる

文化サロンであった。大坂における兼葎堂宅のように、全国各地から岡山を訪れた人は、船着町の河本家に足をとどめたという。五代目河本一阿(1728-1796)や六代目河本立軒(1749-1809)の時代、一阿は庶民教育のために図書館兼学校の設立を藩に願い出て、立軒の時に「経誼堂」を設立した。一阿のために画を提供するなど、玉堂と河本家は深いつながりがある。

同時代を生きた画人たちとはいえ交流があったかどうかは定かでない部分も多いが、想像をふくらませたくなることもある。今後の新たな作品発掘や調査研究でさらに大坂画人のネットワークが明らかになっていくことを期待したい。

※1 高松市歴史資料館第38回特別展図録「讃岐の文人 後藤漆谷の書跡とその周辺」(2005年)に掲載された大原東野の作家解説による。
 ※2 「大国家資料図録」大国家資料保存会 2002年/柳川真由美「大森家・武元家と絵師」(『閑谷学校研究』第16号 2012年)/小西通雄「大原東野について」(『閑谷学校研究』第17号 2013年)
 ※3 浅利尚民「『黄葉亭記』の原本と写本 一岡山藩主池田家旧蔵資料の構造分析を踏まえて」(『MUSEUM』641号 2012年)

◎特別展「光琳を慕う 中村芳中」(会場:当館2階展示室)

会期:2014年9月26日(金)~11月3日(月・祝)

◎【同時開催】岡山の美術展 特別陳列(会場:当館地下展示室)

「芳中と交流した備讃ゆかりの大坂画人」

「黒い水流の謎 光琳《紅白梅図屏風》の技法を再現する 馬場秀雄氏/棚橋映水氏(吉備国際大学)/森山知己氏(日本画家)の試み」



淵上旭江(右)・鼎春嶽(中)・宮本君山(左)《唐武將図》江戸時代中期-後期(18-19世紀) 岡山県立博物館

版をめぐる秋

古川 文子(学芸員)

「版」という言葉から、あなたは何を想像しますか？江戸時代の木版浮世絵やヨーロッパの銅版画、シルクスクリーンを用いたポップアートなど美術館で目にする作品はもちろん、昔懐かしい謄写版(ガリ版)や年賀状印刷のプリントゴッコ、手軽に作れる消しゴム版・芋版も全て版と言えます。凸版、凹版、孔版、平版…と様々な技法を介して、イメージを「複製」することが可能です。

岡山県出身の竹久夢二は、印刷文化の華ひらく近代に、版を表現手段とし、その名を馳せた作家と言えるでしょう。木版単色刷のコマ絵(新聞雑誌の本文と直接関連しない挿画)から出発、その版木を集め詩文とともに編んだ『夢二画集 春の巻』は、人々の共感を呼びベストセラーとなります。さらに、絵葉書や著作・装幀本、多色刷の木版や石版で彩られた雑誌・楽譜等も次々と出版され、「夢二式」のイメージは広く世の中に浸透しました。図版は、大正3年(1914)東京・日本橋に手ずから開店した「港屋絵草紙店」版の芝居絵です。歌舞伎「河庄」より、初代中村鴈治郎演じる紙屋治兵衛の頬かむりの顔を大胆に配し、表情の機微を捉えています。描線のゆらぎや擦れを活かした版に、抒情を旨とする夢二の意識が通い、一様な図像の複製にとどまらない「摺り」の感触が伝わってきます。港屋は、生活を彩る夢二ブランドの品々を商うだけでなく、彼を慕い集まった若い作家たちの作品が並ぶギャラリーにもなりました。詩と版画の同人誌

『月映』を刊行し、創作版画の先駆をなした恩地孝四郎、田中恭吉らも、自画自刻の手摺作品を発表しています。

今年は、夢二生誕130年、『月映』創刊100年を記念して各地で展覧会が開催されます。*

時は移り、複製技術や価値観の多様化した現代においても、版の世界を追求する作家がいます。ここでは、小野耕石**『Hundred Layers of Colors』をご紹介します。高さ数ミリのインクの柱が、びっしりと並んでいるのがわかりますか？手描きの版下から起こした小さなドットの一つ一つが、数十～百回もの刷りを経て立ち上がり、独特の存在感を示しています。緻密な技術と色彩設計により仕上がりをコントロールしていますが、二度と同じものはできません。温湿度等の環境要因と手による「行為」の繰り返しの中で生まれる微かなゆらぎが、作品に複雑な表情を与えているのです。複製の繰り返しがオリジナルな表現を生成するという発想の転換も鮮やかです。本シリーズは、第四回 I 氏賞受賞作家展(会場:当館2階展示室 11月8日-12月14日)でご覧いただけます。

思えば、遺伝情報を司るDNAも、複製を繰り返す過程で起こるわずかな「変異」により、個体や種の多様性を生み出してきました。蛾の鱗粉の美しさに触発されたという小野さんの言葉に、そんな連想がはたらきます。

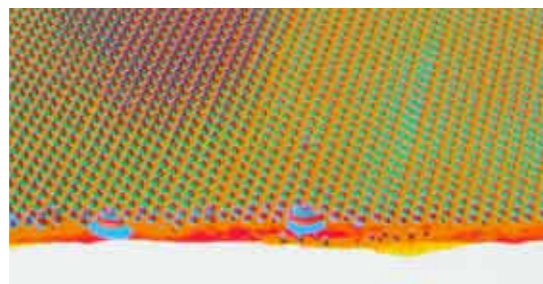
深まりゆく秋、皆さんも「版」の魅力に、触れてみてはいかがでしょうか。



上:竹久夢二《治兵衛のマスク》1914年頃
紙に木版多色摺 34.2×24cm 夢二郷土美術館
右:《Hundred Layers of Colors .008》(接写)
2014年 油性インク、紙/シルクスクリーン 75×90cm



小野耕石《Hundred Layers of Colors》2014年 255×510cm
油性インク、紙/シルクスクリーン (撮影:長塚秀人)



※1「生誕130年竹久夢二展 ベル・エポックを生きた夢二とロートレック」(2014年9月11日-23日 岡山高島屋その後、日本橋高島屋、横浜高島屋に巡回)

『「月映」1914-1915』(2014年11月16日-12月28日 宇都宮美術館 2015年、和歌山県立近代美術館ほかに巡回)

※2 岡山県新進美術家育成「I氏賞」第3回奨励賞受賞者 1979年岡山県倉敷市生まれ

第61回日本伝統工芸展岡山展関連事業

「もっと伝統工芸 備中漆」 伝統の技と美を伝える、支える

中田 利枝子(学芸課長)



採れた生漆(樹液)



芳賀重夫氏による伝統的な漆掻き 昭和62(1987)年 撮影:高山雅之

毎秋恒例の特別展「日本伝統工芸展」。第61回となる今年も担当学芸員は着々と準備を進めている。入選を重ねたベテランから、初入選の新進気鋭作家まで、その力作を一堂に鑑賞できる機会として定着している。「人間国宝」の最近作が鑑賞できるのも見所だ。伝統工芸作品は、原材料の調達、制作に要する時間、さらに作家たちが技術習得に要した期間まで考えれば、どうしても高額になるし、それ故に作品はコレクターが収集するお宝と捉えられがちなのも実情だ。たしかに日用品として愛用するにはもったいないとしても、実際にその美しさを目の前にすると、これほどの技が今日も我が国に伝えられていることは何か誇らしくもあり、後世に伝えてほしいと実感するのである。入館者数はここ数年、横ばいという状況で、伝統の技と美をより多くの人に観賞してもらおうという美術館の課題はなかなかクリアできないているが、県内の小学校に備前焼制作や染織体験の出張授業をしたり、その作品を屋内広場に陳列したりして、将来を担う子ども達にも伝統工芸に親しんでもらう努力を続けている。

さて、作品という形で私たちは伝統の技と美を鑑賞できるわけだが、工芸作家の表現の向こうにはさらにこれを支える地道な技術の継承がある。文化庁が指定する文化財のひとつに選定保存技術(保持者・保持団体)という分類がある。有形無形の文化財を保存するために欠くことのできない「用具の製作、修理等又は材料の生産、製造

等の技術又は技能」が対象となる。具体的には、漆濾紙や漆刷毛の製造、烏梅や藍の生産、建具や屋根瓦の製作といったものである。平成26年7月には日本刀制作に欠かせない松炭を作る「木炭製造保存会」が岡山県で初めて選定保存技術保持団体に認定されたのが記憶に新しい。選定保存技術は表舞台に立つ作品にとってはかけがえのない裏方さんのようなもの。これがなくなってしまうと、作品は成り立たない。

今年の伝統工芸展の期間には、2階展示室「岡山の美術」で備中漆を取り上げたコーナー展示を予定している(会場:当館2階展示室 11月8日-12月14日)。古代から備中の産物として有名であった漆は、ダム建設による植栽地の水没やプラスチック製品の普及などにより生産がいったん途絶えた。備中漆の復興事業は平成6年から始められ、採取が出来るまでになったとのこと。漆を植える土地を確保すること、植栽を管理すること、漆を採集すること、精製すること、など、多くの技術と労力、また時間と資金が投入されてきたことである。経済効率や生産性を楯に「なぜ輸入漆ではいけないのか」と突っ込まれればそれまでであるが、何百年も昔の人が愛でたその美しさを見てみたい、後世の人にも見せてあげたい、と願う人々がこの国の技と美を支えている。透明度が高く艶があると言われる備中漆を使った作品を通して、岡山の伝統工芸を支える方々にも思いを寄せていただける機会になると思う。

「岡山の美術」最近の話題 陶芸コレクションの充実

福富 幸(主任学芸員)



岡本欣三《玳瑁蓋天目大皿 花火》昭和63(1998)年

当館では去る5月30日から7月13日まで「生誕100年 岡本欣三の世界」展を開催しました。幼少期に中国陶磁に魅せられた欣三は、京都で陶芸を学び、戦後、倉敷市に「天神窯」を築きました。いずれの会派にも属さず、一人釉薬の研究と制作に打ち込んだ欣三の陶業を約150点の作品により紹介しました。同時期に開催した岡山在住者として初の文化勲章を受章した「高木聖鶴」展(会期:6月1日-7月6日)との相乗効果もあってか、5000名弱の来館者を数え、多くの方から「岡山にこんな焼き物があったなんて知らなかった」「色がとてもきれい」「すてきだわ」と賞賛の声が届きました。

岡山の焼き物といえば備前焼が筆頭に上がり、次に滋味ある茶陶で知られる虫明焼でしょうか。釉薬物はあまりメジャーではありません。欣三は、復元に取り組んだ^{たいひ さんてんもく}玳瑁蓋天目をはじめ、独自に考案した^{しきんゆう どうじゆこう}紫欣釉や桃壽光、そして青磁や青白磁、辰砂、赤絵、織部、染付、鉄絵など

実に多彩な焼き物を手がけました。黒、茶、紫、青、緑、赤、ピンク、白一光沢のある美しい色が会場を彩り、楽しい展覧会となりました。

嬉しいことに展覧会後、ご遺族から33点の欣三作品と父東陽の画卷1点をご寄贈いただくことになり、今後も折々に見ていただけるようになりました。

またこの度、過去に東備地域の県施設に寄贈され飾られていた87点の備前焼(県有物品)が備前県民局東備事務所から当館に管理替えとなりました。中には県指定重要無形文化財保持者となった伊勢崎満氏、浦上善次氏、各見政峯氏、松井與之氏、松田崙山氏、山本雄一氏、吉本正氏らの若い頃の作品も含まれます。調度的な壺や花入の他、獅子や観音、干支の置物もあります。約60名ほどの作家の確認とデータの整理がついたら、展示のほか、小・中学校での出張授業やワークショップなどでも積極的に活用していこうと考えています。

展覧会スケジュール

